



粉屋の鼠

おきな

むかし、ある田舎の村はづれに一軒の粉屋がありました。前
 は見渡す限り青い麥畑で、裏には絶え間なく回る水車の音がや
 ましく聞えて居りました。

さて此粉屋の水車小屋には例の鼠股が何十匹となく澤山住まつて
 居て夜になると天井や壁の間から出て来ては麥やか米の御馳走に
 なつて居りました。處が此の鼠の中に一匹の子鼠がありました。
 此子鼠は大層な怠けものでして不性者でありました。何をす
 るにもかつかうがつて中々容易には動きません。或晩のこと、外の
 鼠達は例の通り麥やか米の採集に出掛け様として
 甲「お前も行かないか」と云ひましたが不性者は何とも云はず、
 黙つて考へ込んで居りました。スルト外の鼠達はもどかしがつて
 乙「オイ、不性者何うするんだよ、早くきめないと僕等は行つて
 仕舞うよ」

と云ひましたが、不性者はそれでも一向平氣でそして然も懶氣に

「僕は行つても行かないでもないや」と云つて居りましたので外のものは「勝手にしろ」と云ひながら皆行つてしまひまし

た。頓て一二時間もしたと思ふ頃大勢の鼠はドヤ／＼と返つて來ました。見ると誰れも／＼何か心配事

があるらしい顔付をして居ました。そして皆天井の一隅に集つた所で一番老寄の大鼠は梁の上から一同を見渡して

大鼠「コレ／＼皆の者、吾々が此粉小屋に住まうのもモ一おしまいにせねばならぬ様だ。今の處では残つて居る麥や米はまだ大分あるが何しろ粉屋が引き越して仕舞つたのだから、ソ／＼

長くは居られまい。夫れに小屋も大分古くなつて柱は曲つて來たしするから何時何時危険ないことがないとも限らぬ。就いては急ぐ譯でもないが是れから何處へ引き越したものか考へねば

なるまい。夫れとも何時迄も此處に居るとしよ

うかしら、皆は何う考へるかね」と云ひました。スルト外の鼠達は口を揃へて

「皆それはもう、云ふ迄もなく何れ引き越すことにして皆で唯其行先を考へ様ではありませんか」と云ひましたが唯一人例の不性者は何とも云

はず黙つて茫然して居ましたので老鼠は聲かけて老鼠「何うだ、不性者、前は何方がいいと思ふか」と聞きましたが不性者は然も面道臭いと云

ふ様な顔付で「僕には何方がいいか判らないや」と云つて居りました。兎に角是で此小屋にも長くは居れないと云ふので

外の鼠達は何れも寄り／＼引き越の相談をして居りました。スルト或日の事、大層な大暴風雨で裏の小川は水

が溢れて古い水車小屋は泥水で一抔になりそして風の吹く度に唯さへ曲がつた柱は今にも折れるかと思ふ様になりました。そして時々、ミシ、ピシ

リ、など、大きな音がして何とも云へぬ凄いの有様でした。ソコデ大勢の鼠達はまたも天井の大廣間

で會議を致しました。例の老寄の鼠は梁の上から

外の暴風にまげぬ大きな聲を出して

「何うだへ、皆の衆、愈此小屋も今日限りだね、

ぐづぐづして居たら何んな目に遇ふか判らない

今の中に逃げ出すにしようではないか。そう

云ふ中にも潰れるかも知れん」と云ふと外、鼠

達も皆大賛成で、

「行う、直に行う、行く先きは隊長の考にま

かさう、隊長！何處へでもいゝから連れて行く

て下さい」

と云ひますので老寄の鼠は決心して

「夫れでは愈出掛け様か」と云ひ掛けました、

時にまだ何とも云はない鼠が一匹居るのに氣が付

きました。ソコデ老寄鼠は

「オイ、例の不性者！お前はまた黙つて居るじ

やないか、今は黙つて居る時ではないぞ早く何

とか極めないか」と云ひましたが不性者は矢張

不性者で例の通り然もうるさいと云ふ顔付で

「僕にや判らないや」と云ひました。是には流石

の老鼠も腹を立て、「宜しい勝手にするがいゝ

前の様なものはもう誰も構つて遣りはしない、
其代り死んだつて恨むことは出来ないぞ」と云ひ
ました、不性者は一向平氣で

「死ぬか死なないか判りやしない」と云ひましたの
で外の鼠達も呆されてしまいました。

老寄鼠は仕方がないので

「ソレデハ行かう！、右へ……準備へ、番號！」
と號令をかけて勢揃をして、頓がて

「右向け右、前へ進め」と云ふと一列に並んだ大
勢の鼠は足踏そろへて、チュツ、チュツ、チュツ、チュ

々々々々、チュツ、チュツ、チュツ、チュツチュクチュ

と鼠の喇叭を吹きながら暴風雨の中を何處へか行
つてしまひました。

不性鼠は小屋の入口迄出て来て大勢の後見送つて
居ましたが別段一所に行かうとも思はないと見え

て今しも最後の小鼠の姿が道の曲がり角から消え
ると共にノツンリと身を起して破はれた水車の傍

に來てドゥ〜と凄い音をして落ち行く水を眺め
ながら

「ア、く、是から此水車小屋は僕一人のものだ、ナアニ皆の居ない方が氣樂でい、や御馳走も一人で食べて居れば何時迄もあはるは」

と云つて居ました。スルト天井の方でビシリ、とえらい、けた、ましい音がしましたので今迄平氣で居た不性鼠も我知らず首を縮めました。暫くすると又今度は前よりも一層大きなビシリと云ふ音がしたかと思ふと、ドシン、メリ、メリ、と云ふ音がして小屋の向ふの隅の天井が一本の梁

と一所に落ちて來ました。是には流石のんきな不性鼠も驚いたと見えて我知らず戸口の方に駆け出して今しも土間へ飛び下りて敷居を飛び越え様とした時に

ゴーツと云ふ一吹強い風が來たと思ふと、ビシリ、バリ、バリ、と云ふ大きな音がして此水車小屋は全くつぶれてしまいました

翌日の朝、暴風雨が止んで川の水も平時に返つた頃村の人達は破れた水車小屋を片付けに來てだん

柱や丸太を退けて行くと、頓がて入口の敷居

と梁との間でおせんべいの様に潰れた一匹の鼠を見付けました。そして人達は

「鼠は例好なもので家の到れそうになつた時などには能く前から逃げてしまふものなのに此鼠は何うしたのだらう」と不思議に思ひながら隣の家の三色猫に遣つてしまひましたとさ。

何んでも博士

お う な

とある田舎に一人の薪賣りの老人がりました。此老人の家から程遠からぬ都に一人の博士がりましたが、老人は時々薪を以て行つては色々の事を此博士から教つて來ました。そして博士と云ふものは誠にえらいものだと思ふに居ました

唯一つ附に落ちぬことのあるのは彼の博士は時々博士それは私にも判らない。何々博士の處へ行つて聞いて御覽ん！」と云ふことです。

博士はえらい人であるのに何故なんでも判らないのだらうと不思議に思つて居りました。或日例の通り薪を持つて博士の家に來ました、そ